

石見銀山領の社会階層別出生率と結婚率(1) 真宗の出生率が高いか？

廣嶋清志

はじめに

浄土真宗門徒についてその教義の影響から墮胎・間引きを忌避するため出生率・人口増加率が高いと指摘されてきた(宮本一九六一、有元一九九七、立浪一九九七)が、このことに關して人口史学・歴史人口学において研究はそれほど多くない(2)。そこで、本稿では石見銀山領の宗門改帳を用いてこの命題の検証に取り組みたい。

この宗門改帳(宗門帳)は、島根大学図書館所蔵の熊谷家文書に含まれるもので、その主要部分が電子ファイル化されている(3)。そこには、一時点(文久三年(一八六三)、一文久四年)における六三村、二八、八四六人を含む。ただし、銀山町はこの宗門改帳には含まれていない。本稿では各女性の属する家の宗門別の出生率(fertility、出生力)とこれに關連する結婚率(nuptiality、結婚力)を検討する。その際、あらかじめ、重要な社会階層である持高別階層の出生率を分析しておく。

結婚率とは初婚・再婚・死離別の発生率とその結果としての配偶關係、すなわち既婚か未婚か、また既婚の場合、有配偶か死離別かという状態の構成割合を表す。出生率については結婚率によって除し結婚出生率(有配偶出生率および既婚出生率)を求める。出生率はこの結婚率と結婚出生率の両面から決められる。墮胎・間引きの出生率への影響を考える場合には、この両者のうち後者を通して出生率に影響があるかどうかを検討しなければならない。

持高は農民の経済階層を表すものとして従来から着目され、持高で表される階層により出生・結婚および人口再生産、家の存続に關して差が存在することが指摘されてきた。すなわち、持高階層の上層ほど結婚率、出生率が高く、再生産において優っているという。本研究で扱う宗門改帳には、持高が約半数程度記載されている。

宗門に關しこの地域では、浄土真宗が優勢であるが、他の宗門門徒も存在し、その宗門間の比較が可能と思われる。そもそも宗門の影響について比較研究するには、同じ地域、あるいは少なくとも地域的条件の似通った住民間で比較する必要がある。遠く離れて地域的条件が異なる住民間で比較した場合どのような条件がその差をもたらしているかを明らかにすることは困難だからである。しかし、浄土真宗は村ぐるみで布教されたと言われ、また、村の中では他宗門徒にも影響力をもっていると言われる(喜多村二〇〇五)から、同じ地域において宗門間での程度の意識、行動の差が生まれるものか疑問もある。本稿ではともかく石見銀山領における浄土真宗の出生率が他宗門に比べて高いといえるのかどうか分析する。後で見るように、持高についての出生・結婚への影響は、かなり明瞭である。そこで、最後に宗門別の出生率や結婚率の背後に持高の影響が潜んでいないかを検討するために、持高に分けて、その上で宗門の間の比較を行う。

宗門帳における記載はすべて数え年であるので、ここで年齢の扱いについて述べる。数え

年によつて計算される平均年齢を実年齢（出生時を〇・〇歳とし、その後の経過時間で示す）で表す。そうすれば、現代の満年齢にもとづく平均年齢とそのまま比較可能になる。数え年×歳とは、 x 一年前に生れたコーホート（世代）に他ならない（廣嶋二〇〇二）。宗門帳の記載された年齢（数え年）の単純平均が x 歳ならば、平均実年齢は、一歳を引き、 $x - 1$ ・〇歳と表される。たとえば、数え年による単純平均年齢二五・〇歳（この集団中に一歳を含まない）は実年齢二四・〇歳を意味する。宗門改の調査時点における数え年年齢の単純平均が x 歳の場合、平均実年齢もやはり $x - 1$ ・〇歳とすることができ、これは年央（七月一日）現在と解釈する。なお、今回扱う宗門改は「三月」一日現在で作られている。調査時年齢満〇・四歳、五・九歳、一〇・一四歳などの五歳階級に対応するものは、数え年一・五歳、六・一〇歳、一・一・一五歳・・・あるいは数え年一・六歳、七・一一歳、一・一・一六歳などの中間にあたるので、どちらでもよいが、今回は後者を使った。本論文の平均年齢は、実年齢に統一され、以下では、小数点を表記した数値で表される。数え年は当然整数値で表す。

一 社会階層

一・一 持高

宗門帳には家ごとに「 $\times$ 何人 内何人男 何人女」とまとめ書きがある。この家を世帯、戸と扱う。宗門帳の末尾のまとめ書きには「家数何軒、高持百姓何軒、無高百姓何軒」と書かれている。したがって、無高は別に区分すべきだったかもしれないが、〇石と見て、一石未満に区分した。

宗門帳に記載された持高を各村ごとにみると、記載のある戸数の割合（記載率）は六、三七〇戸中四八・五％と半数弱にとどまる。記載の状況は、村ごとにかなり違い、その記載率は〇から一〇〇％まで広く分布する。持高は、一石未満、一・五石、五・一〇石、一〇石以上、不詳の五つに区分した。

村ごとの平均持高は、〇・一から一〇・六石まで広く分布するが、全村で平均三・三石となる。図1にこの平均持高と村の石高（天保郷帳による）を散布図に示す。平均持高が大きい村では記載率が低いという負の相関（相関係数 -0.50 ）が見られ、平均持高の大きい村では持高の小さい世帯が記載されていないものが多いとみられる。持高の利用にあたっては、上のような持高記載率に注意しなければならない。

一・二 持高と世帯および牛・馬

各家の戸主の平均年齢は、表1のように、持高との関係を見ると、一石未満と一〇石以上で他より二歳ほど若い。世帯の規模は持高と比例している。これは、戸主の年齢にともなうて大きくなる面があると見られるが、あとで見るように出生率が持高と比例することの結果でもあるとみられる。

戸主に女性が占める割合は、持高と反比例し、一石未満の八・三%から一〇石以上の一・八%まで減少する。男性戸主の死後、息子の結婚などによる戸主交代の容易さが石高に比例することの現れであろう。戸主の有配偶率は一石未満で最も低く七六・九%、五一〇石でもっとも高く九一・七%で、おおむね持高と比例している。

宗門帳には各家の牛と馬の正数が書かれている。これと各家の持高との関係を表2、3に示す。牛馬の正数の記載率は、牛九九・四%、馬九九・二%と高い。持高の記載率よりも高いことは興味深い。牛と馬を比較すれば、保有される家畜は圧倒的に牛で、牛は三六・六%で保有されるが、馬は〇・三%に過ぎない。

各家の牛の保有数は、大部分が一疋である(平均〇・四〇疋)。牛を保有する家の割合(保有率)は持高別にみると、一石未満では二七・二%であるが、一・五石では六八・三%、五一〇石八六・五%、一〇石以上で八〇・五%である。このように持高とともに牛の保有率が上昇し、一石以上では牛の保有は普通であったといえる。一〇石以上でも牛を保有しないものがある(一九・五%)のは、なぜであろうか。自分で耕作しないのかもしれない。

一・三 宗門

表4は宗門帳に含まれる村をまとめて郡別の宗門別戸数を示す。宗門帳は鑑などを除き原則として、宗門別になっている。ただし、一部の村では複数の宗門が合冊され一冊になっている場合がある。いずれにせよ、異なる宗門の世帯(家)が混じっている宗門帳はない。各村の宗門帳に宗門ごとに寺院が押印署名する形式になっているからである。したがって、宗門の記載はほぼ一〇〇%に近く、記載のないのは〇・六%である。なお、各世帯内で異なる宗門の信徒がいて異なる世帯として記載されていることはないものと思われる。

熊谷家文書の中に銀山領のすべての村が含まれていないのと同様に、ある村のすべての宗門の宗門帳が含まれているとは限らず、ある宗門の宗門帳が欠けている場合がある。たとえば、大森町では明らかに浄土真宗が欠けている。このため、この宗門帳による村別の戸数が村の全ての戸数を表すとは限らない。このような制約を持っているが、総数でみると、真宗が八二・八%で最も多くなっている。真宗は村単位で普及したといわれるが、村全部が真宗という村は数少ない。また、そこに真宗以外の信徒がいなかったということはこの資料では確認できない。

表5に明治十七年(一八八四)の宗門別寺院数を示す。使った宗門帳より二〇年あとのものであるが、参考にすることができるだろう。寺院数は石見地域で真宗が五四・九%で、とくに邑智郡では七三・一%とくに真宗が多い。出雲地域で曹洞宗が二九・六%と最も多いのと対照的である。真宗の場合は寺領を持たないため一寺院あたりの信徒数が多いといわれているから、表4の宗門別戸数がこの寺院数(五四・九%)以上に真宗に集中している(八二・八%)のは当然で、両者はほぼ同じ状態を示しているものと考えられる。

石見地域においては、ある村の真宗以外の寺院や信徒は、その村の真宗門徒との協力関係があったと言われ(喜多村二〇〇五)、真宗門徒の思考や行動の影響を受けていたものと考

えられ、石見地域で真宗とそれ以外の門徒住民の行動の違い、たとえば出生行動などの差を検出しようというのはかなり難しいかもしれない。ただしあとで有配偶率で見ると真宗と他宗門との間の通婚にはある程度障壁があったとみられる。

なお、後で見ると(三・七、表12)、宗門間の持高の差は大きい。

二 社会経済階層と出生率・結婚率

二・一 出生率の計測

出生率は各世帯の一五歳以上女子の同居児・五歳についてその出生時の女子の年齢を算出し、一八六三年およびそれ以前の四年間の出生を復元し、一年間の出生率として計算したものである(同居児法)。すなわち、一八五九年一月一日 一八六三年三月一日(四・一六七年間)における女子 x 歳の年間の平均的な出生率は、一八六三年の x 歳女子の一歳児、 $(x+1)$ 歳女子の二歳児、 $\dots(x+4)$ 歳女子の五歳児によって以下のように計算される。「一歳児 $\pm$ 二歳児 $\pm$ 三歳児 $\pm$ 四歳児 $\pm$ 五歳児」 $\div x$ 歳女子 $\times(x+1)$ 歳女子 $\times\dots\times(x+4)$ 歳女子 $\div$ 四・一六七。なお、一八六〇、一八六二年は閏年であったが、ここではこれを無視する。

このような同居児法による出生率は、出生後一八六三年三月一日の宗門改までに生じる様々の要因によって真の出生率からの食い違いが生れる。出生後の出生児自身の死亡あるいは離別・死別・移動による母子の分離などの要因である。とくに出生児の死亡については、死亡した出生児が除かれる分、出生率が低下する。乳児死亡は出生に対して $200/1000$ 、また幼児死亡率は $300/1000$ 程度あるものとみられる。この出生率はこれらの乳幼児死亡率の半分程度が減じられているとみられる。すると、乳幼児死亡率から考えて、真の出生率は計算された出生率の一・二・一・三倍とみられる。しかし、以下では、このことを無視して述べる。

また、持高など社会階層別の出生率においては、その死亡率格差も反映しているはずである。つまり、この同居児法による出生率の格差には死亡率格差によって生み出された部分が含まれ、出生率格差は死亡率格差によって拡大される。しかし死亡率格差の実態がわからないのでこの点も無視する。

二・二 結婚率の計測

結婚状態は、ここでは出生への影響の観点から計測する。したがって、五〇歳頃より若い年齢における結婚を対象とする。各人の配偶関係は、宗門帳において戸主との続柄および配偶者、子との同居の有無により既婚と未婚とに2区分する。したがって、出生は有配偶の者からのみ生ずる。この判別法は死別・離別を十分捉えられない可能性があり、既婚者はその分少なめになっているものと考えられる。もしそつだとすると、次に述べる初婚年齢を計算した場合、高めになることになる。また、当然、既婚者が初婚であるか再婚であるかはわからない。

この既婚者数により一時点の年齢別の既婚者の割合（既婚率）あるいは未婚率が計算され、これによって静態平均初婚年齢（SMAM）が計算できる（廣嶋二〇〇二）（4）。そのような年齢別既婚率の静態を生み出すような、初婚の発生の仕方（平均初婚年齢）が計算できるのである。しかし、当然これは初婚を経験するものについてのものであるから、平均初婚年齢の若さがその集団全体（生涯未婚者を含む）が経験する平均的な結婚期間の長さを表すとは限らない。出生への影響を考えるためには、むしろこのような平均結婚期間の方が必要である。

このため、ここでは各年齢区間別の既婚率の平均（合計既婚率と称する）を用いることにする。たとえば、年齢区間一五 五一歳について、全区間の平均的な既婚率と合計既婚率とが異なるのは、おもに死亡率の影響で各年齢区間別の女子数が若い方で大きいからで、これを同数と仮定する後者の方が大きくなる。

既婚女子のうち夫と同居していない者を死離別として、同居している者を有配偶と判別する。ただし、この宗門帳はいわゆる本籍主義で、同居の夫が長期の出稼ぎに出ている場合もその旨の記載はない（5）。有配偶者が人口に占める割合を有配偶率とする。有配偶率は既婚率より死離別率が少ない。合計有配偶率は合計既婚率と同様に定義され、死離別を考慮する分、合計既婚率より実質的な結婚生活の量をあらわし、出生に対する結婚の効果を表す上でより適切である。

二・三 結婚出生率の計測

結婚した者についての出生率は結婚出生率と呼び、有配偶出生率と既婚出生率の二種が考えられる。今回の配偶関係の判別法により、結婚外の出生率は零である。年齢別有配偶出生率は年齢別出生率を年齢別有配偶率によって除して求める。これがある年齢範囲において合計したもののが合計有配偶出生率となる。既婚出生率についても、同様に年齢別既婚出生率と合計既婚出生率とが定義できる。

なお、同居児法によって有配偶出生率が計算された例は少ない（廣嶋二〇〇七）。間引き、墮胎による出生率（出生力）への影響をみるとすると、出生率（年齢別出生率、合計出生率）そのものではなく、結婚の影響を除いたこの有配偶出生率によるべきである。

二・四 持高と出生率

各戸の宗門帳に記載された持高別に出生率をみると表6のようになる。合計出生率は一石未満では二・〇六、一〇石以上では二・八九である。これは一・〇以下の差であってそれほど大きくないが、持高に比例している点で持高と出生率との関係は比較的明確なものであるといえる。

この出生率は乳幼児死亡率の半分が除かれているということも考慮しても、その後の死亡率を考慮すると、一石未満の二・〇六では明らかに再生産水準には達していない。一・五石の二・四〇で再生産水準ぎりぎりではないだろうか。また、地域全体としての二・三六とい

う水準も人口増加が〇に近い水準であると見られる。現に、一八六二、六三年のこの石見銀山領の人口増加率は 〇・六七%であった(廣嶋二〇〇四)。

以上の結果は、階層と出生率が相関するという点で、従来の研究結果と共通する。鬼頭一九七八は持高五石を境として上層、四・三、下層三・六、速水一九九二は濃尾六村について一〇石以上五・九、一〇石未満三・八としている。しかし、いずれも合計出生率はもっと高く、差はもっと大きい。

この持高による出生率の差が結婚率と結婚出生率のどちらから、どれだけ生れるかの分析を次に行う。

二・五 持高別出生率の差の要因分解

表6の持高別出生率是有配偶率と有配偶出生率の二つによってもたらされたものと考えられるので、持高別出生率の差をこの二者の差に要因分解することができる。ここでは、出生率の差が最大である一石未満と一〇石以上について、その差をこの二つの要因によって分解する。二つの持高階層別の年齢別有配偶率と有配偶出生率を図2と図3に示し、図4に要因分解の結果を示す(6)。

有配偶率、有配偶出生率ともに出生率の差を生み出し、〇・五七〇・八三〃六八・七%が有配偶率、三二%が有配偶出生率の差によるものであるといえる。なお、既婚率と既婚出生率に分けた場合、〇・四九〇・八三〃五九%が既婚率、四一%が既婚出生率によるものであることが分かる(図表略)。

このように、持高別の出生率の差を生み出すのは有配偶率または既婚率に表される結婚率の差と結婚内の出生率(有配偶出生率または既婚出生率)の差の両方によるといえるが、とくに前者の比重が過半を占める。なお、有配偶出生率の差においては、前述のように死亡率格差や養子によってもたらされた部分があるとみられるが、それ以上の差があるとする、その十分に人為的統制の方法がなかったとみられるこの時期において、持高階層における出生率の差が有配偶出生率の差によってももたらされていることに注目しなければならない。

三 宗門別の出生率・結婚率

三・一 宗門別出生率

各家の宗門帳に記載された宗門別に算出した年齢別出生率および合計出生率は表7の通りである。浄土真宗の合計出生率は二・二八で、予想に反してとくに高い方ではない。むしろ真言宗(二・七三)、禅宗(二・五六)が高くなっている。また、法華宗(一・七二)が低い。図5は宗門別年齢別出生率を示す。三七歳以後の出生率において各宗門の違いが目立ち、法華<浄土<真宗<禅<真言の順に並び、これが合計出生率の順に表れている。このような差が何に基づくものかは明確でないが、あとで見る年齢別既婚率と関係しているとみられる。

三・二 宗門別既婚率

宗門別の年齢別既婚率および静態平均初婚年齢、合計既婚率を表8に示す。宗門別の平均初婚年齢が若ければ、その合計既婚率が高いと予想されるが、実際にはそうではない。それぞれの生涯未婚率（四七 五一歳および五二歳以上の未婚率の平均）が、大きく異なるからである。合計既婚率は、浄土宗の〇・六四から真宗の〇・七〇まで差はあるが、あまり大きなものではない。生涯未婚率は浄土真宗八・五%と禅宗八・〇%はほとんど変わらないが、浄土宗では一六・六%と高い。

図6の宗門別の年齢別既婚率を見ると、二〇代における宗門別の高さの順が合計既婚率の順をほぼ決めているといえる。法華[△]浄土[△]禅[△]真宗の順は、前節の三七歳以後の出生率の順と似ている。結婚の遅れが出生の遅れとして現れたものと考えられる。

三・三 宗門別有配偶率

宗門別の年齢別有配偶率および合計有配偶率を表9に示す。合計有配偶率について、浄土宗の〇・四八は、真宗の〇・五八、禅宗の〇・五七に比べ低い。離別や再婚に関する宗教的な習慣の違いがあれば、このような差の一因となるが、宗教的な関わりがあるのか今のところわからない。禅宗のその高さの理由は不明であるが、真宗のその高さについては他宗門との通婚を避ける多数者であることから説明出来る。

図7の宗門別の年齢別有配偶率を見ると、三七歳以上において死離別の影響により低下するが、おおむねそれ以前の順位が保持される。したがって、宗門間における有配偶率の差は既婚率の差よりさらに明確になるのである。

三・四 宗門別死離別率

年齢別死離別者数を年齢別人口で割った年齢別死離別率、および合計死離別率を宗門別に表10に示す。合計死離別率は浄土宗がもっとも高く〇・一二で、逆に真宗〇・〇九、禅宗で〇・〇九となっているが、これが離別や再婚に関する宗教的要因によるものかどうかはわからない。

三・五 宗門別有配偶出生率

表11、図8は宗門別有配偶出生率を示す。宗門別の年齢別有配偶出生率および合計有配偶出生率を表11に示す。間引き、堕胎による出生率への影響をみるとすると、この有配偶出生率による必要がある。

この有配偶出生率は、対応する年齢について表7の出生率を表9の有配偶率で除したものである。合計有配偶出生率は年齢別有配偶出生率を合計したもので、有配偶で五一歳まで生きた場合の女性一人あたりの子ども数を意味する。一五歳からの合計、つまり一五歳で結婚した場合は四・八九になるが、二二歳からの合計は三・六一で、結婚年齢に大きく左右される。また、この五に近い大きさは、東日本を除く中部および西日本で普通であったように、

鬼頭一九八九は二十歳以上の合計有配偶出生率が四・八七〇七・四八の範囲の事例を報告している。

浄土真宗の合計有配偶出生率（二二歳以上計）は三・五七で、予想に反してとくに高い方ではなく、逆に低い方であるといえる。むしろ真言宗（五・三一）、禅宗（四・〇九）が高くなっている。浄土宗もやや高い（三・九四）。また、法華宗（三・二五）のみが真宗より低い。図8は宗門別年齢別有配偶出生率を示す。浄土真宗は綺麗な直線的低下を示すが、注目すべきは、実質的にもっとも重要な二一・二六歳において真宗がもっとも低率であることで、この結果によって真宗の合計有配偶出生率が低率となっているといえる。この年齢の出生児は主に第一子にあたるので、この年齢の出生率の統制は堕胎・間引きではない他の手段によるものと考えるべきだろう。

宗門別有配偶出生率では出生率よりもさらに強く「真宗の高出生率」という予想は否定されたものといえるだろう。

三・六 宗門別出生率の差の要因

以上の結果を基にして、宗門別出生率についてどのような差を問題にするかが問題であるが、ここでは単に統計上の便宜から、宗門別に見てもっとも門徒数の大きい真宗六三六二（六三六〇）人と浄土宗四八〇人を比較することにする。

真宗と浄土宗とを比較すると、合計出生率においては二・二八、二・一七と大きな差はない（表7）が、合計有配偶出生率では三・五七、三・九四と逆に浄土宗の方が大きい（表二）。しかし、合計既婚率はそれぞれ〇・七〇、〇・六四（表8）で、結婚の発生の面では真宗が大きく、合計死離別率は〇・〇九、〇・一二で（表10）、再婚の大きさあるいは離別の発生の少なさの面からも真宗が優位で、結局、両面から合計有配偶率が〇・五八、〇・四八と（表9）真宗が高くなっている。このように、真宗は、有配偶出生率が低いにもかかわらず、結婚率の面から出生に有利で、結局、浄土宗より合計出生率が若干高くなっているのである。

三・七 持高別、宗門別出生率

出生率については持高による差が大きいことを第二章で確認した。そこで宗門別の出生率差を各宗門の持高構成の差による影響を取り除いて比較してみよう。そのためには持高別に分けた上で宗門別に比較する方法がある。しかし、この場合、区分された対象の人数が小さくなりすぎる区分がある。そこで、持高構成が同じだと仮定した計算（標準化）による値によっても比較を行う。

表12により出生率の検討の前に、あらかじめ宗門別持高別の女性数を確認しておく。持高不詳が半数近い点に注意する必要がある。持高が分かるものについて計算した各宗門別の平均持高は、法華六 八石 禅五・六石 浄土四・九石 浄土真三・八石 真言二・四石の順となっている。かなり大きな差のように思える。宗門間でなぜこのように持高が異なるか

は、興味ある問題である。浄土真宗が下層で広まったと言われることが表れているのかもしれない。

この宗門別平均持高の順は、表7に示す宗門別の合計出生率の順、真言二・七 禅二・六 浄土真二・三 浄土二・二 法華一・七とはほぼ逆の順であり、したがって、宗門間の出生率の差は、宗門間における持高構成の差によってもたらされたものではないことが示されている。

表13に持高別に浄土真宗とそれ以外に分けて、合計出生率を示す。真宗以外の五 一〇石、一〇石以上はそれぞれ五六人、八四人に過ぎないので、比較は五石未満にとどめるべきである。比較可能な一石未満と一 五石についてみると、一石未満においては浄土真宗(一・九八)が他の宗門(一・八一)より高いが、一 五石では逆である。真宗以外を真宗と同じ持高構成になるよう持高について標準化すると、真宗以外の合計出生率は二・二三になり、真宗の二・二九と極めて近くなる。したがって、真宗の出生率が高いという予想はほとんど否定されたといえよう。いいかえると、標準化しない出生率の真宗と真宗以外の差(二・二九と二・一九の差)は持高構成の差によって生まれた見かけ上の差で、実質上の差は存在しない。

表14に持高別に宗門別の合計既婚率、合計有配偶率、合計死離別率を示す。ここでも、真宗以外の女子数が四八、五九である持高五石以上では宗門間の比較は不可能で、五石未満について比較する。

浄土真宗が真宗以外に比べて、合計既婚率と合計有配偶率とも一石未満で高く(〇・六四対〇・六一、〇・五四対〇・五〇)、また合計死離別率では一石未満で低い(〇・一一対〇・〇九)。さらに、上記のような標準化を行うと、真宗以外の合計既婚率では変化なく、〇・六三であり、合計有配偶率では真宗以外が〇・五二から〇・五四に高まるが、どちらも真宗の方が高い。なお、生涯未婚率は真宗が真宗以外に比べやや低く(〇・〇九対〇・一一)、この関係は標準化しても(〇・〇九対〇・一一)変わらない。これらの結果は合計既婚率から見た結果とも一致する。

以上のように、宗門別の持高構成の影響を除いても、既婚率および有配偶率は浄土真宗がそれ以外よりやや高いといえる。

三・八 持高別、宗門別結婚出生率

次に結婚出生率について同様に検討する。表15に持高別に浄土真宗とそれ以外に分けて、合計有配偶出生率および合計既婚出生率比を示す。合計有配偶出生率比とは合計出生率を合計有配偶率で除いたもので、年齢別有配偶出生率(年齢別出生率/年齢別有配偶率)にもとづく合計有配偶出生率(表11参照)の代用指標として用いる。また、同様に、合計既婚出生率比とは合計出生率を合計既婚率で除いたもので、年齢別既婚出生率(年齢別出生率/年齢別既婚率)にもとづく合計既婚出生率の代用指標として用いる。

表15のように、前者では、浄土真宗は一石未満でわずかに高く(三・六七、三・六五)、

後者でも同様であるが、差はやや大きい（三・一二、二・九五）。一・五石ではその関係は逆であり、差は大きい（三・八五対四・八二、三・三四対四・二八）。以上のように一石未満と一・五石で相互に反する結果となり、真宗と真宗以外の関係は確定できない。

そこで、これらの結婚出生率について持高構成を標準化した値を、上記の対応する標準化された出生率と結婚率とによって計算する。表15の右端に示すように、標準化した結婚出生率はいずれも浄土真宗がそれ以外の宗門に比べて小さいことを示している（三・九八対四・一六、三・四六対三・五四）。すなわち有配偶出生率および既婚出生率は持高構成の影響を除いても、浄土真宗の方が低い。ただし、この差は非常に大きいものではない。

以上のように、持高構成を考慮すると、合計出生率は浄土真宗とそれ以外の差は認められない。しかし、結婚出生率（有配偶出生率および既婚出生率）は持高構成を考慮しても、浄土真宗の方が低い。つまり、墮胎・間引きと関わる結婚出生率について真宗におけるその高さは否定されたものといえる。

おわりに

真宗の出生率が墮胎・間引きを忌避するため高いという説が妥当であるか検討するという問題意識のもとに、出生率に比較的強く関わる持高と出生率との関係を検討した上で、真宗の出生率とそれ以外の宗門とを比較する研究を行った。

持高と結婚率との関係は、持高の大きさにともなう結婚の優位性が見られる。たとえば、持高と既婚率・有配偶率とがおおむね比例し、持高と死離別率がおおむね反比例するという現象は基本的な事実として注目される。さらに、結婚率のいくつかの局面で最上層の一〇石以上では、五・九石層よりやや不利のように見られることも農村における上層の家維持に関して注意すべきである。それにもかかわらず持高と出生率の正の相関が観察されるのは、それを補う一〇石以上の有配偶出生率の大きさの結果であることがわかった。

真宗の合計出生率は他宗門に比べわずかに高いが、宗門間で平均持高に差があり、宗門別の持高構成の影響を除去した標準化合計出生率でみると、真宗とそれ以外の差はまったくない。結婚出生率については逆に真宗は他宗門に比べわずかながら明らかに低い。これは、持高構成を考慮しても変わらない。また、年齢別有配偶出生率が二一・二六歳という第一子の多い年齢で真宗が最も低いという年齢形態も特徴的である。

このように真宗の結婚出生率が低いことは、墮胎・間引きを忌避するから高いという予想に反するものである。真宗の各村内における影響力の強さを考えると、石見銀山領内における住民の出生率を真宗とそれ以外とで比較することは不適切とも考えられたが、実際に検討してみると、予想に反して真宗の方が結婚出生率が低いという比較的明確な事実を発見し、これがどういう原因によるものかを検討する課題が生まれた。ただし、この差が決定的といえるほどのものかどうか今後さらに検討を要する。

宗門間で、生涯未婚率、既婚率、死離別率に目立った差があり、真宗はこれらから見て結

婚率が高く、有配偶出生率の低さが補われ、その結果、出生率において他宗門と差がなくなるといふ構造をもっているらしいことが判明した。このような構造が何を意味するのかもひとつの課題である。真宗の結婚率の高さは他宗門との通婚を避ける多数者であることによると考えられる。

真宗門徒は結婚出生率が他宗門徒に比べ低いという事実が確定的なものとすると、これらの予期しなかった課題に対してつぎのような解答を仮説として提示しておきたい(7)。真宗門徒は結婚出生率を低く統制するという点に表れているように、出生行動について他宗門に比べより合理的な意識と行動様式を持っていた、この結果、出生率を低く維持しながら結婚率を高める自由度を持つことができたのではないだろうか。

では、この有配偶出生率を統制する方法は何だったのだろうか。墮胎・間引きも皆無ではなくある程度使われたかもしれない。しかし、その程度は真宗の方が高いとは考えられない。もし墮胎・間引きのみによるなら、真宗の有配偶出生率の方が高くなるはずだからである。したがって、真宗が低率となるには、他の方法を取っていたはずである。いわゆる性交中絶法 *coitus interruptus* ではなからうか(8)。これは真宗門徒の倫理(有元一九九七)禁欲・努力とも合致するだろう。この有配偶出生率の統制は、持高別に有配偶出生率の差が見られたことから推測されるように、真宗門徒だけに特有というのではなく、真宗門徒ではその程度がより強いものと考えべきであろう。

真宗門徒が有配偶出生率を意識的に統制していたという推定は、真宗の結婚率の高さによって支持される。つまりもし、真宗門徒が有配偶出生率を意識的に統制できないのであれば、統制が可能な結婚の方をより強く統制するはずだからである。

それでは、真宗の高出生率は全く否定されるのだろうか。おそらくそうではなく、真宗についてある時期まで高出生率であったが、あるときから他の宗門と差のない出生率へと変化したものと考えられる。つまり、幕末の石見の状況はすでに変わってしまった後の状態で真宗が相対的に高出生率でなくなった状況を示すと見られる。他地域に比べて高出生率だったかどうかは別途検討が必要である。

本研究で用いた宗門帳は一時点のものであり、動態事象について直接の結果がなく、静態の結果のみによって分析しなければならないという不利さを持っているが、含まれる人口が大きい(真宗約六三〇〇人対、非真宗約一三〇〇人)ため比較的精緻な分析に耐えるという長所をもち、したがって、得られた事実はある程度の確実性を持つものと考えられる。

謝辞

本研究に用いた電子ファイル化された宗門改帳 *NOA* を作成された速水融氏と落合恵美子氏を中心とするユーラシア・プロジェクト(UEP)関係者の皆様に深く感謝したい。本研究は島根大学法文学部二〇〇四・二〇〇六年度山陰研究プロジェクト(代表廣嶋)、島根大学二〇〇七年度萌芽研究プロジェクト(田中則雄代表)、日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)一九三三〇〇七、二〇〇七・〇九年度(代表廣嶋)として助成を受けた。

注

- (1) 本稿は、廣嶋二〇〇七を基にしたもので、より詳しい説明はこれを参照されたい。
- (2) 日本の墮胎・間引きについて検討した Seitz (1992) は宗教的要因に言及していない。
- (3) 四〇において作成されたデータシートに記入されていて、まだ電子ファイルフォーマットに未入力であった宗門、持高、牛馬の項目は、本プロジェクトにおいて追加入力した。
- (4) 静態平均初婚年齢 $\text{single age mean age at marriage}$ SAM は、50 歳までに結婚する者についての未婚延べ期間を結婚する者に平均的に割り振ったもの。数え年 52 歳までの既婚割合を使い、 $\alpha = (51 \text{ 歳既婚割合} + 52 \text{ 歳既婚割合}) / 2$ とし、 $\text{SAM} = 50 \times \alpha$ 、 $\sum (251 \text{ 歳}) \text{ 年齢別既婚割合} / \alpha$ 。
- (5) この要因分解法の計算式は、廣嶋二〇〇二参照。
- (6) 石見は大工・木挽・左官・石工などとして出稼ぎする者が多かったと言われている(有元一九九七)。
- (7) 出稼ぎによる夫の不在はこの地域の一般的な現象であって、その頻度・期間の宗門間の差がないという前提に立って推論する。今後の研究によってこの前提が崩れる場合には異なる議論が必要になる。
- (8) この直接的証拠を挙げるのは難しく、近代的避妊法の普及以前の状況について述べられたものもほとんどない。筆者は一九六九年長野県の小都市において七〇歳過ぎの戦前農民運動家の男性から「われわれはバースコントロールはもっぱら膣外射精だった」と聞いた。時代は四〇・五〇年ずれるが、ひとつの証言になるだろう。

文献

- 有元正雄一九九七『宗教社会史の構想 真宗門徒の信仰と生活』吉川弘文館。
- 有元正雄二〇〇二『近世日本の宗教社会史』吉川弘文館。
- 喜多村正二〇〇五『真宗寺院と地域社会 島根県瑞穂町の事例』『社会文化論集』第二号、一、十九
- 鬼頭宏一九七八『徳川時代農村の人口再生産構造 武蔵国甲山村、一七七七―一八七一』『三田学会雑誌』七一巻四号
- 鬼頭宏一九八九『前近代日本の出生率 高出生率は事実だったか』『上智経済論集』三六巻二二号
- 立浪澄子一九九七『越中の棄子・養子・小児往生論関係文書 浄土真宗の浸透と子育て意識』『太田素子編』近世日本マビキ慣行史料集成』刀水書房
- 速水融一九七三『近世農村の歴史人口学的研究』東洋経済新報社
- 速水融一九九二『近世濃尾地方の人口・経済・社会』
- 廣嶋清志二〇〇一『出生率低下をどのようにとらえるか? 年齢別有配偶出生率の問題性』『理論と方法』三〇号、Vol. 16 No. 2、一六二―一八三、数理社会学会。

廣嶋清志二〇〇二「幕末石見天領の人口機構 単年次宗門改帳による觀察」『経済科学論集』
二八、一・二八

廣嶋清志二〇〇四「幕末石見天領の地域別人口変動」『経済科学論集』三〇、五一・六六

廣嶋清志二〇〇七「石見銀山領の社会階層別出生率と結婚率 持高別・宗門別較差を中心として」『宗門改帳からみる山陰の近世社会』山陰宗門改帳研究会

宮本常二一九六一（一九八七）『庶民の発見』講談社学術文庫

図1 村別の石高(天保郷帳)と平均持高

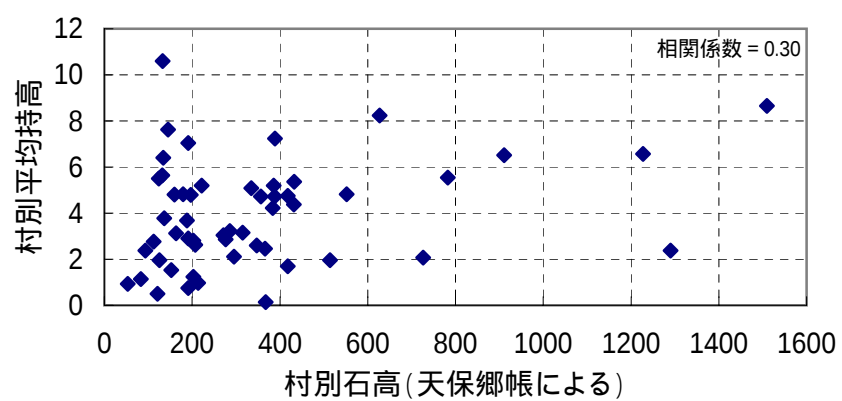


表1 持高別家の属性

	総計	1石未満	1-5	5-10	10-	不詳
軒数	6,370	1,645	899	326	220	3,280
戸主平均年齢(歳)	43.0	43.3	45.4	45.1	43.5	42.0
世帯規模(人)	4.5	4.3	5.0	5.6	6.0	4.3
戸主女性割合(%)	8.1	8.3	5.6	3.4	1.8	9.6
戸主有配偶割合(%)	79.5	76.9	86.8	91.7	87.3	77.1
平均年齢(実年齢)は数え年の単純平均-1.00で求める(本文参照)。						

表2 持高別牛足数

牛足数	総計	1石未満	1-5	5-10	10-	不詳
総数	6,370	1,645	899	326	220	3,280
0	4,014	1,159	284	44	43	2,484
1	2,198	445	569	258	148	778
2	86	1	34	12	22	17
3～16	31		11	12	7	1
不詳	41	40	1			
割合(%)						
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
0	63.0	70.5	31.6	13.5	19.5	75.7
1	34.5	27.1	63.3	79.1	67.3	23.7
2～16	1.8	0.1	5.0	7.4	13.2	0.5
不詳	0.6	2.4	0.1	0.0	0.0	0.0

表3 持高別馬足数

馬足数	総計	1石未満	1-5	5-10	10-	不詳
総数	6370	1645	899	326	220	3280
0	6302	1604	896	324	209	3269
1	10	1	1	1	6	1
2	4			1	3	
不詳	54	40	2		2	10
割合(%)						
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
0	98.9	97.5	99.7	99.4	95.0	99.7
1-2	0.2	0.1	0.1	0.6	4.1	0.0
不詳	0.8	2.4	0.2	0.0	0.9	0.3

表4 郡別宗門別戸数

郡	総計		浄土	浄土真	真言	禅	天台	日蓮	法華	不詳
合計	6,370	100.0	6.5	82.8	1.2	6.0	0.0	0.0	2.9	0.6
邇摩	2,217	100.0	12.5	75.3	0.9	5.9	0.0	0.0	5.1	0.3
安濃	254	100.0	11.8	49.6	10.2	5.9	0.0	0.4	22.0	0.0
邑智	2,261	100.0	1.9	91.2	0.4	5.5	0.0	0.0	0.3	0.6
那賀	1,638	100.0	3.8	86.6	1.2	6.8	0.0	0.0	0.4	1.2

表5 1884(明治17)年郡別寺院数:島根県

郡別	総数	天台	真言	浄土	臨済	曹洞	真	日蓮	時
合 計	1,353	37	125	125	156	330	503	69	7
出 雲	665	34	72	57	119	197	131	51	4
島根	68	5	11	6	11	27	7	1	0
秋鹿	17	0	4	0	8	5	0	0	0
意宇	98	1	14	11	10	36	17	7	2
能義	68	9	12	3	6	29	5	3	1
仁多	38	0	2	2	9	14	6	5	0
大原	51	0	7	3	9	23	8	1	0
出雲	46	0	2	3	26	6	8	1	0
楯縫	64	14	3	2	23	5	5	12	0
神門	144	3	14	22	12	36	39	17	1
飯石	71	2	3	5	5	16	36	4	0
石 見	678	3	49	67	37	128	372	18	3
仁摩	141	0	19	21	2	24	68	7	0
安濃	84	1	5	16	0	16	40	6	0
邑智	167	0	9	9	7	19	122	1	0
那賀	156	2	15	15	24	26	71	2	0
美濃	72	0	0	4	3	19	42	1	3
鹿足	58	0	1	2	1	24	29	1	0
隠 岐	10	0	4	1	0	5	0	0	0
周吉	8	0	2	1	0	5	0	0	0
穩地	0								
海士	0								
知夫	2	0	2						
構成割合(%)									
合 計	100.0	2.7	9.2	9.2	11.5	24.4	37.2	5.1	0.5
出 雲	100.0	5.1	10.8	8.6	17.9	29.6	19.7	7.7	0.6
島根	100.0	7.4	16.2	8.8	16.2	39.7	10.3	1.5	0.0
秋鹿	100.0	0.0	23.5	0.0	47.1	29.4	0.0	0.0	0.0
意宇	100.0	1.0	14.3	11.2	10.2	36.7	17.3	7.1	2.0
能義	100.0	13.2	17.6	4.4	8.8	42.6	7.4	4.4	1.5
仁多	100.0	0.0	5.3	5.3	23.7	36.8	15.8	13.2	0.0
大原	100.0	0.0	13.7	5.9	17.6	45.1	15.7	2.0	0.0
出雲	100.0	0.0	4.3	6.5	56.5	13.0	17.4	2.2	0.0
楯縫	100.0	21.9	4.7	3.1	35.9	7.8	7.8	18.8	0.0
神門	100.0	2.1	9.7	15.3	8.3	25.0	27.1	11.8	0.7
飯石	100.0	2.8	4.2	7.0	7.0	22.5	50.7	5.6	0.0
石 見	100.0	0.4	7.2	9.9	5.5	18.9	54.9	2.7	0.4
仁摩	100.0	0.0	13.5	14.9	1.4	17.0	48.2	5.0	0.0
安濃	100.0	1.2	6.0	19.0	0.0	19.0	47.6	7.1	0.0
邑智	100.0	0.0	5.4	5.4	4.2	11.4	73.1	0.6	0.0
那賀	100.0	1.3	9.6	9.6	15.4	16.7	45.5	1.3	0.0
美濃	100.0	0.0	0.0	5.6	4.2	26.4	58.3	1.4	4.2
鹿足	100.0	0.0	1.7	3.4	1.7	41.4	50.0	1.7	0.0
隠 岐	100.0	0.0	40.0	10.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0

島根県1887『島根県統計書 明治17年』明治20年。1884年12月31日現在。

石見那賀郡の黄檗1寺院の表示を省略した。総数には含む。

表6 持高別、年齢別累積出生率、合計出生率、および平均出生年齢

年齢	合計	1石未満	1-5	5-10	10-	不詳
女子数	(7,629)	(1,905)	(1,234)	(464)	(342)	(3,684)
合計	2.36	2.06	2.40	2.70	2.89	2.41
15-21 歳	0.18	0.17	0.21	0.28	0.27	0.17
22-26	0.44	0.35	0.34	0.56	0.63	0.48
27-31	0.55	0.51	0.58	0.40	0.80	0.56
32-36	0.52	0.41	0.56	0.67	0.61	0.53
37-41	0.39	0.37	0.41	0.47	0.40	0.40
42-46	0.21	0.20	0.24	0.31	0.19	0.18
47-51	0.06	0.06	0.06	0.00	0.00	0.08
平均出生年齢(歳)	33.4	33.6	33.6	33.6	31.7	33.4

出生率は1863年の1-5歳同居児による。

平均出生年齢は年齢別出生率により、単純平均から1.0歳引いた実年齢。

出生率は年齢区間の累積率。合計は合計出生率。

図2 持高(1石未満、10石以上)別、有配偶率

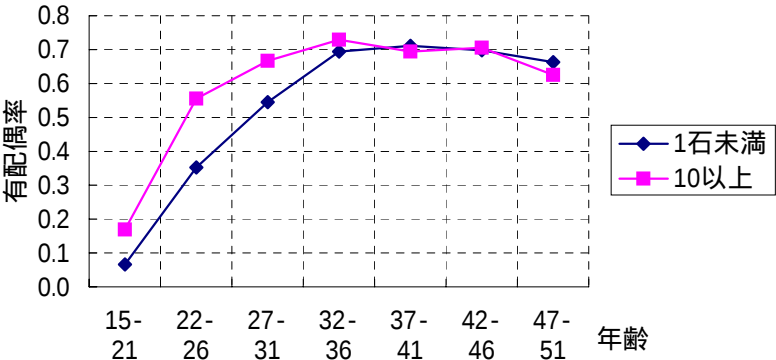


図3 持高(1石未満、10石以上)別、有配偶出生率

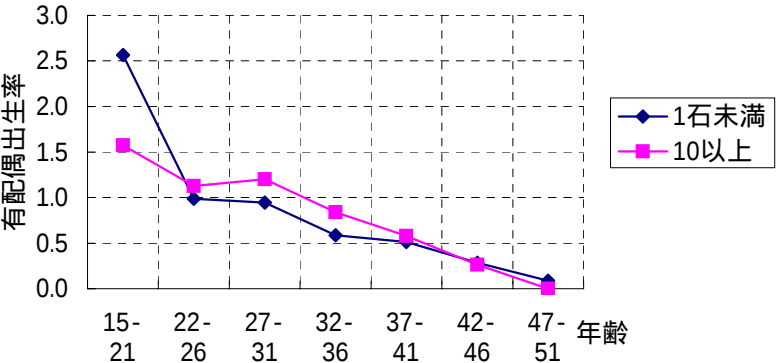


図4 出生率の差の要因分解:
1石未満の10石以上との差

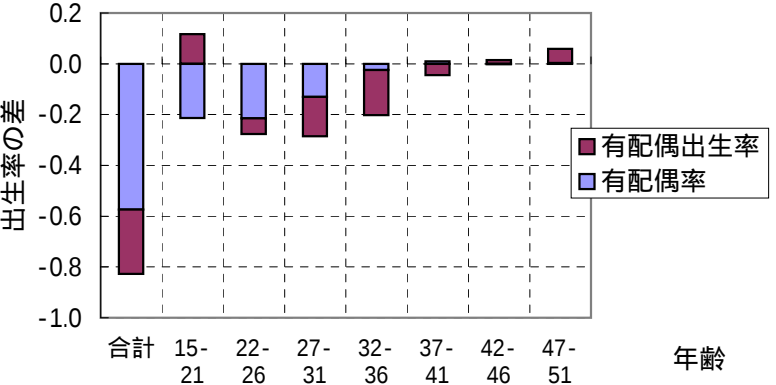


表7 年齢階級別出生率、合計出生率

年齢	宗門計	浄土	浄土真	真言	禅	法華
(女子数)	(7576)	(480)	(6361)	(79)	(440)	(216)
合計	2.26	2.17	2.28	2.73	2.56	1.72
15-21 歳	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.03
22-26	0.09	0.07	0.09	0.12	0.09	0.08
27-31	0.11	0.13	0.11	0.10	0.13	0.07
32-36	0.10	0.11	0.10	0.10	0.10	0.11
37-41	0.08	0.07	0.08	0.13	0.10	0.04
42-46	0.04	0.03	0.04	0.07	0.05	0.02
47-51	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.00

出生率は1863年の1-5歳同居児による。

各年齢階級別の平均出生率。

年齢欄の合計は合計出生率。

図5 宗門別年齢別出生率

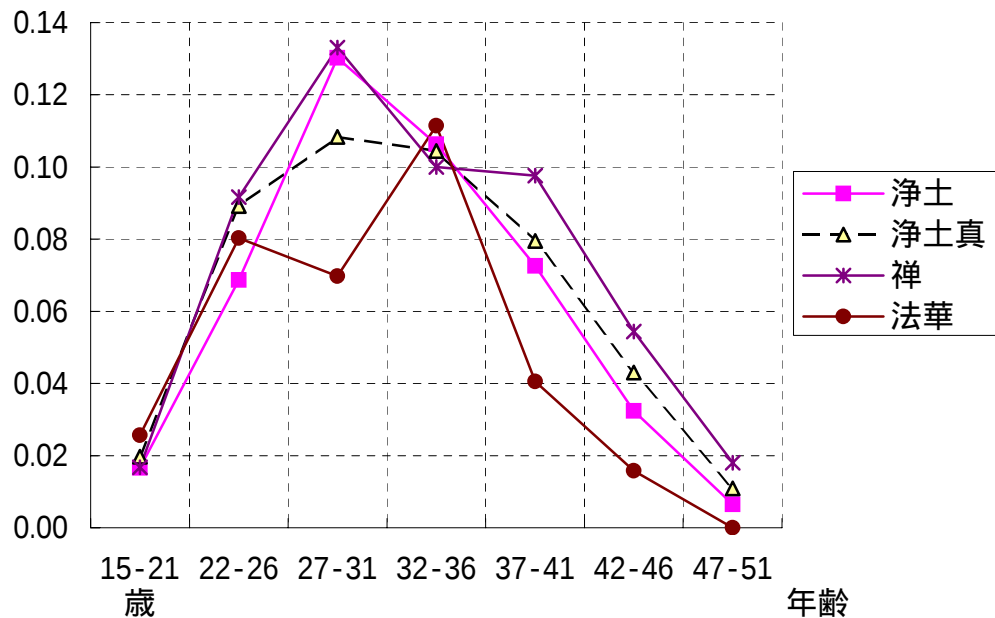


表8 宗門別、年齢別女子の既婚率、平均初婚年齢

年齢	総数	浄土	浄土真	真言	禅	法華	不詳
(15-51女子数)	(7628)	(480)	(6360)	(79)	(440)	(216)	(52)
総数(15-51)	0.57	0.51	0.58	0.54	0.58	0.55	0.48
15-21 歳	0.08	0.04	0.08	0.11	0.13	0.11	0.00
22-26	0.43	0.34	0.45	0.25	0.44	0.31	0.17
27-31	0.66	0.61	0.67	0.67	0.65	0.55	0.22
32-36	0.79	0.76	0.79	0.60	0.81	0.86	0.00
37-41	0.84	0.77	0.84	0.91	0.88	0.81	0.75
42-46	0.89	0.89	0.90	1.00	0.79	0.81	1.00
47-51	0.91	0.82	0.91	0.73	0.92	0.96	1.00
52-	0.91	0.85	0.92	0.87	0.92	0.93	1.00
静態平均初婚年齢 (歳)	24.2	18.9	24.5		27.1	23.0	
合計既婚率(15-51)	0.66	0.64	0.70	0.64	0.69	0.67	0.52
生涯未婚率	0.089	0.166	0.085	0.202	0.080	0.052	0.000

静態平均初婚年齢（SMAM）は52歳までの年齢別既婚率による。

合計既婚率は年齢区間別既婚率の単純平均。

生涯未婚率は47-51歳および52歳以上の未婚率の平均。

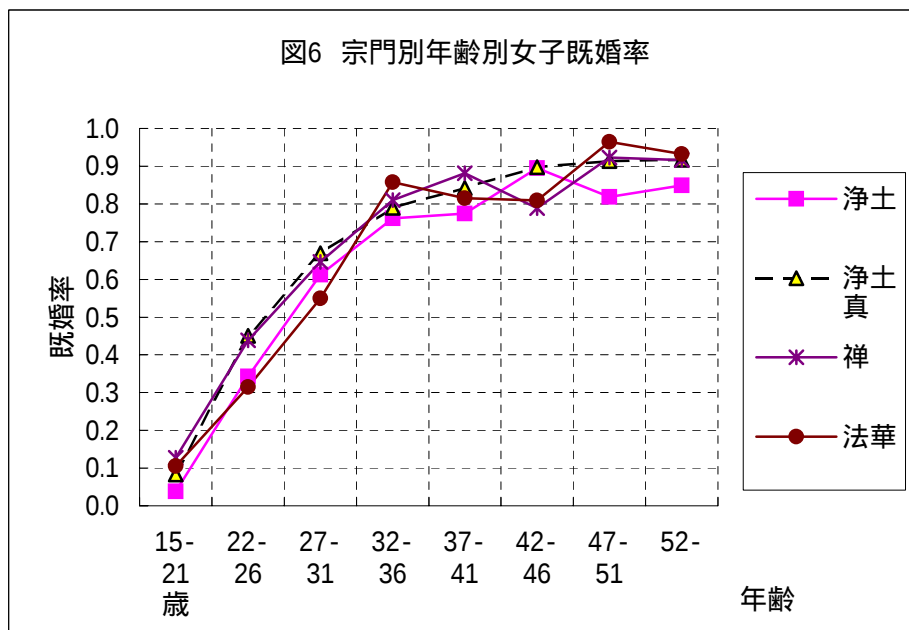


表9 宗門別、年齢別女子の有配偶率

年齢	総数	浄土	浄土真	真言	禅	法華	不詳
(15-51女子数)	(7629)	(480)	(6361)	(79)	(440)	(216)	(52)
総数	0.49	0.41	0.49	0.52	0.49	0.44	0.39
総数(15-51)	0.50	0.41	0.51	0.52	0.51	0.45	0.38
15-21 歳	0.08	0.04	0.08	0.11	0.10	0.11	0.00
22-26	0.40	0.32	0.42	0.25	0.40	0.29	0.08
27-31	0.61	0.55	0.62	0.67	0.58	0.55	0.22
32-36	0.71	0.67	0.71	0.50	0.74	0.71	0.00
37-41	0.75	0.65	0.75	0.91	0.81	0.63	0.75
42-46	0.74	0.68	0.75	1.00	0.65	0.71	0.71
47-51	0.69	0.48	0.71	0.64	0.72	0.68	0.75
52-	0.44	0.40	0.45	0.52	0.41	0.41	0.40
合計(15-51)	0.57	0.48	0.58	0.58	0.57	0.53	0.36

合計(15-51)は合計有配偶率、15-51歳各年齢区間の有配偶率の単純平均。総数に日蓮宗1を含む

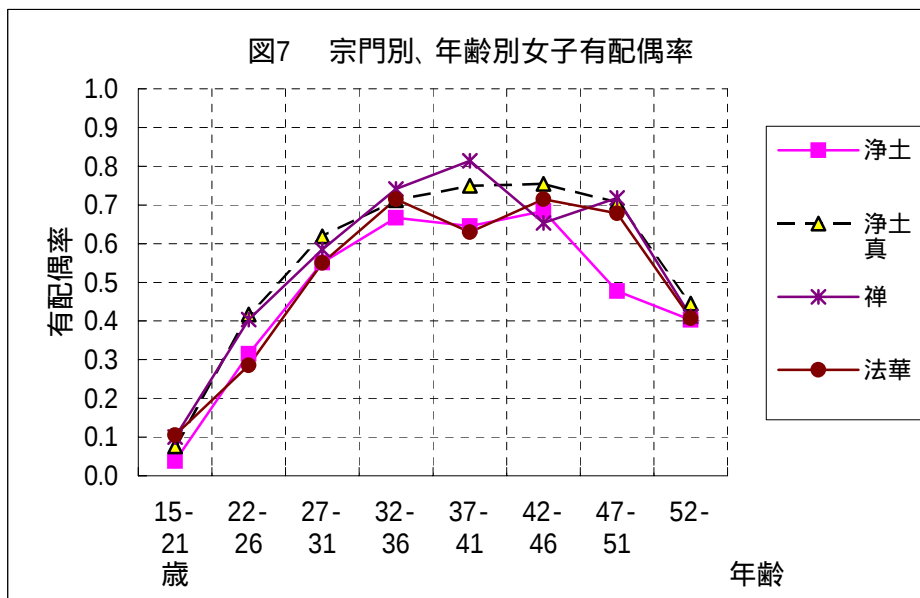


表10 宗門別、年齢別女子の死離別率

年齢	総数	浄土	浄土真	真言	禅	法華	不詳
(15-51女子 数)	(7629)	(480)	(6361)	(79)	(440)	(216)	(52)
総数	0.16	0.17	0.16	0.10	0.16	0.19	0.18
総数(15-51)	0.07	0.10	0.07	0.03	0.07	0.09	0.10
15-21 歳	0.01	0.00	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00
22-26	0.03	0.03	0.03	0.00	0.04	0.03	0.08
27-31	0.05	0.06	0.05	0.00	0.06	0.00	0.00
32-36	0.08	0.10	0.08	0.10	0.07	0.14	0.00
37-41	0.09	0.13	0.09	0.00	0.07	0.19	0.00
42-46	0.15	0.21	0.14	0.00	0.13	0.10	0.29
47-51	0.22	0.34	0.21	0.09	0.21	0.29	0.25
52-	0.47	0.45	0.47	0.35	0.50	0.53	0.60
合計(15-51)	0.09	0.12	0.09	0.03	0.09	0.11	0.09

合計死離別率は各年齢区間の死離別率の単純平均。総数に日蓮宗1を含む。

表11 年齢階級別有配偶出生率、合計有配偶出生率:1859-63年

年齢	宗門計	浄土	浄土真	真言	禅	法華
(女子数)	(7577)	(480)	(6361)	(79)	(440)	(216)
合計	4.89	6.12	4.86	5.76	4.93	4.47
合計(22-51)	3.61	3.94	3.57	5.31	4.09	3.25
15-21 歳	0.25	0.44	0.26	0.09	0.17	0.24
22-26	0.22	0.22	0.21	0.47	0.23	0.28
27-31	0.18	0.24	0.18	0.15	0.23	0.13
32-36	0.15	0.16	0.15	0.20	0.13	0.16
37-41	0.11	0.11	0.11	0.14	0.12	0.06
42-46	0.06	0.05	0.06	0.07	0.08	0.02
47-51	0.02	0.01	0.02	0.03	0.03	0.00

出生率は1-5歳同居児による。
各年齢階級の平均出生率を有配偶率で除したもの。
年齢欄の合計は合計有配偶出生率。
総数に日蓮宗1を含む。

図8 宗門別年齢別有配偶出生率

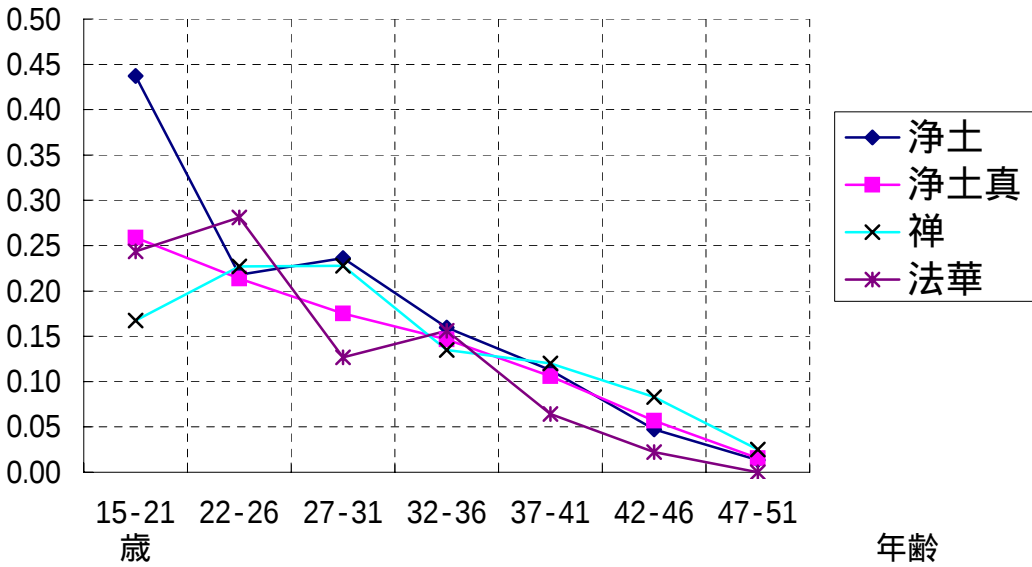


表12 宗門別,持高別,女性数

	総数	持高不詳	持高計	平均(石)	1石未満	1-5	5-10	10-
総数	10,492	5,063	5,429	4.0	47.9	30.9	12.4	8.8
浄土	652	381	271	4.9	62.4	22.9	5.2	9.6
浄土真	8,767	4,126	4,641	3.8	46.5	32.0	13.2	8.4
真言	113	69	44	2.4	56.8	25.0	13.6	4.5
禅	601	298	303	5.6	46.2	30.0	11.6	12.2
日蓮	1	1	0					
法華	293	188	105	6.8	38.1	28.6	7.6	25.7
不詳	65	0	65	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0

女性は年齢13歳以上。

表14 持高・宗門別(2区分)合計既婚率・合計有配偶率・合計死離別率

持高(石)	総数	浄土真	真宗以外 (標準化)	真宗以外 (標準化)
合計既婚率				
総数	0.66	0.66	0.63	0.63
1未満	0.63	0.64	0.61	
1-5	0.67	0.67	0.67	
5-10	0.70	0.70	0.68	
10-	0.70	0.68	0.75	
不詳	0.66	0.67	0.61	
生涯未婚率				
総数	0.09	0.09	0.11	0.10
1未満	0.11	0.11	0.09	
1-5	0.07	0.07	0.04	
5-10	0.05	0.05	0.00	
10-	0.05	0.05	0.10	
不詳	0.10	0.09	0.14	
合計有配偶率				
総数	0.57	0.58	0.52	0.54
1未満	0.53	0.54	0.50	
1-5	0.59	0.59	0.59	
5-10	0.63	0.63	0.63	
10-	0.59	0.57	0.67	
不詳	0.57	0.58	0.51	
合計死離別率				
総数	0.09	0.09	0.10	0.09
1未満	0.10	0.09	0.12	
1-5	0.09	0.09	0.08	
5-10	0.07	0.07	0.04	
10-	0.10	0.11	0.08	
不詳	0.09	0.08	0.10	
女子数				
総数	7628	6361	1267	
1未満	1905	1572	333	
1-5	1234	1090	144	
5-10	464	416	48	
10-	342	283	59	
不詳	3683	3000	683	

真宗以外（標準化）は真宗以外が真宗と同じ持高構成であると仮定した場合の値。

表13 持高・宗門別(2区分)合計出生率

持高(石)	総数	浄土真	真宗以外 (標準化)
総数	2.28	2.29	2.19
1石未満	1.95	1.98	1.81
1-5	2.32	2.25	2.87
5-10	2.66	2.71	2.22
10-	2.74	2.52	3.73
不詳	2.33	2.39	2.08

女子数			
総数	9,678	8,084	1,594
1石未満	2,379	1,976	403
1-5	1,552	1,369	183
5-10	603	547	56
10-	448	364	84
不詳	4,696	3,828	868

5歳階級別出生率による。

真宗以外（標準化）は真宗以外が真宗と同じ持高構成であると仮定した場合の値。

表15 持高・宗門別(2区分)合計有配偶出生率比と合計既婚出生率比

持高(石)	総数	浄土真	真宗以外 (標準化)
合計有配偶出生率比			
総数	4.01	3.98	4.18
1石未満	3.67	3.67	3.65
1-5	3.96	3.85	4.82
5-10	4.22	4.30	3.49
10-	4.63	4.39	5.56
不詳	4.09	4.08	4.08

合計既婚出生率比			
総数	3.47	3.46	3.51
1石未満	3.09	3.12	2.95
1-5	3.45	3.34	4.28
5-10	3.81	3.86	3.28
10-	3.94	3.69	4.99
不詳	3.56	3.58	3.42

合計有配偶出生率比は合計出生率を合計有配偶率で除したもので、

年齢別有配偶出生率（年齢別出生率/年齢別有配偶率）にもとづく合計有配偶出生率の代用指標。

合計既婚出生率比は合計出生率を合計既婚率で除したもので、

年齢別既婚出生率（年齢別出生率/年齢別既婚率）にもとづく合計既婚出生率の代用指標。

真宗以外（標準化）は真宗以外が真宗と同じ持高構成であると仮定した場合の値。